▲岡山城。黒塗りの装いから、別名「烏城（うじょう）」と呼ばれ、城の一部が国の重要文化財に指定されている。城跡は烏城公園として人々の散歩やランニングコースになっている

問屋町の一角。早朝からオープンしているカフェもあり、出勤前に立ち寄るビジネスマンや、散歩の休憩に新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる年輩の方々も多く見られた

夜の問屋町。街全体を1枚の写真に収めることができないほど、店舗やショップが波紋のように広がりつつある。昼でも夜でも、家族連れ以外に学生らしき姿はほとんど見られなかった

後楽園。茶畑や茶屋もあり、岡山城を眺めながらお茶を頂ける。隣接する岡山城の郭の代わりとして築かれたという説もある

倉敷美観地区。蔵屋敷が倉敷川に沿って並ぶ。川沿いを歩きながら時々目を閉じて江戸時代を想像してみる。大八車が行きかい、威勢の良い声の掛け合いやあいきつ、店先で水をまく和服女性や子犬が目に浮かんだ

世界のまち -⑬-

岡山県岡山市―城下町と再生した問屋町が同居

温故知新が息づく街並み

岡山城や日本三大名園の一つ後楽園で知られる岡山県。近年は問屋町を再生し、老若男女、県内外問わず多くの客でにぎわっている。一級建築士の赤嶺しげたかさんに、岡山のまちの魅力をつづってもらった。

飛行機のわずかなスリップ音とともに降り立った瞬間、カバンから携帯用ダウンジャケットを取り出していた。冬の岡山。気温差20℃。到着ロビーを抜け外に出ると、息が真っ白で、2時間前までシャツ一枚だったのが夢のようだった。無意識に奥歯を噛み締め、肩に力が入る。

昨年から縁あって岡山の現場を行き来している。実際に足を運ぶまでのイメージは桃太郎伝説とキビ団子だけだった。それが大きく変わろうとは…。

岡山市北区問屋町。名前の通り、ふた昔前は問屋会社が並ぶ活気のある街だったと聞いた。バブル崩壊後、景気の川に流されるように一つ、二つと会社が撤退し、そこに、古い倉庫ビル群だけが残されていた。それを勇気のある人達が違う形で再生させたのだ。カフェ、ダイニング、雑貨、洋服、古着、エステ、ネイルサロン。そして、ブルーシールアイスクリーム。

驚いたことに、週末の家族連れやランチタイムだけではなく、平日の深夜までビジネスマンや女性客でにぎわっている。20代から60代までと年齢層は幅広く、みな身なりに気を使い、ライフスタイルを楽しんでいるように見えた。

聞くところによると、県外からの来客も多いという。確かに、パーキングで他府県ナンバーが目につき気にはなっていたが、それほどこの街が注目を集めているという証しだと感じた。かつては問屋街を行きかっていた大型車用の広い道路。センス良くリノベーションされた古いビル。どこか外国の街にいるような気持ちにさせてくれる。

近くに岡山城。すぐ隣には後楽園。少し車で走ると倉敷の美観地区。幾つもの時代を越えた歴史ある建造物や町並み。そして、再生された街。ひとつの言葉がすぐに浮かんだ…。「温故知新」。道中、何度も目にした場面を思い浮かべてみる。年輩者を、他人である若者が敬い気遣う光景。そしてまたその逆もあり、年輩者が敬われるべきという態度を見せず若者を気遣っているように見えた。はっとさせられた。それが何となく岡山という街全体を造り、優しく包み込んでいるかのように思える。

帰りの飛行機で窓の外を眺めながら沖縄を想った。強い勇気を持って見習わなくては、伝えなくてはと、いくつもの出会いに感謝しながら。

赤嶺しげたか（一級建築士事務所Simple 代表）